

---

# 夢みた時間

ふるーつ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

夢みた時間

### 【Nコード】

N8680C

### 【作者名】

ふるーつ

### 【あらすじ】

交通事故で意識不明になった蘭は、不思議な世界にいた。そこで出会った謎の少女。蘭は無事、現実に戻るのか？そして、彼女と新一の意外なつながりとは。

静かな所。

草原とも湿原ともつかない、やたらと緑のそこには、あちこち『色』が点在していた。

色とりどりの花や木が咲きほこるその箇所は、世に言う桃源郷とっげんきょうのようだった。

その1点に、ひとりの少女が立ち上がった。長すぎる髪をなびかせ、花畑のひとつへ向かう。

ふと、少女が口を開いた。同時に、強い風があたりを包む。

「なんであたし、　　てるんだろっ……」

「ねえ新一、次はこっち行こうよ」

「はあ……ったく、オメーはこーいうところ好きだよなあ」

やたら元気のいい蘭に、新一がボヤク。まったく、女ってのはなんでこう買いた物が好きなんだ　　そう言いたげだ。

「なによ。久々に要請がないから、どこへでも付き合っつていったの、新一でしょ？」

水戸黄門の印籠のごとく、新一自身の台詞を復唱する蘭に、二の句が継げない。

「……ハイハイ」

今日来たのは、杯戸ショッピングモール。新一が組織を壊滅させ、蘭の元に戻って半年あまり。やっと新一が関わるべき事後処理がほぼ終わり、元の日常に戻ってきた所だった。

と、道路の向こうにも、蘭はよさそうな店を見つけた。

「ねえねえ、あのお店行ってみよう」

と、新一をひっぱって道路を渡る。信号は無論青だ。

しかし 信号のルールを無視した妙な車が、ふたりに向かってつっこんで来たことに、先に気付いたのは蘭だった。

「危ない ！！」

新一がその異常に気付いたのと、蘭が新一を突き飛ばしたのは、ほぼ同時だった。

ズザツ 新一がしりもちをつく。が その音は、ドン！という別の音にかき消された。

「…っ蘭！！」

即座に、地面に叩きつけられた蘭に駆け寄る。車は、やけにブレキ音を響かせながら、瞬間に走り去った。

「蘭ッ……しっかりしろ！」

声をかけつつ、脈や出血の状態を確認する新一。しかし、蘭の返事はない。意識を失っていた。

まもなく、誰が呼んだのか救急車が到着した。新一は、今確認した心拍や脈の状態を話しつつ、救急車に同乗した。

「蘭……蘭ッ！しっかりしろ！すぐ病院に着くから……！」

救急隊に任せたことで少し安心した新一は、蘭に声をかけることに専念した。

お前を、絶対に死なせたりしない そう心中で繰り返して。

……蘭は目を覚ました。上半身を起こし、あたりを見回す。

やたらと、緑色の場所だった。足元が少し湿っているのは、雨でも降っていたのか。

と、後ろから声がした。

「あんた、どうしたの？」

振り向くと、中学までいっていないくらい少女が、蘭を見下ろしていた。くりっとした目は、少づつり気味。生まれてから、一度

も切っていないんじゃないかというくらい、長い髪が目につく。

「あ、えつと……ここ、どこなのかな？」

真つ先に浮かんだ疑問を尋ねてみる。少女は少し首をかしげ、逆に聞いてきた。

「…あんたこそ、ここで何してんの？」

「あ、ごめんなさい。私さつき目が覚めたばかりで、よくわからないの」

「ふーん……」

少女はさして興味もなさそうに、蘭に背を向けてすたすた歩きだした。蘭は慌てて後を追った。

「じゃあ、なんでここにいるのか、全然覚えてないんだ」

「そうなの。あなたは、いつからここに？」

並んで、恐らく「草原」部分にふたり座って会話していた。少女の答えは意外だった。

「…わかんない。あたしも、気が付いたらここにいた。どのくらいいるかなんて、もう覚えてない」

「そう……あなた、名前は？私は毛利蘭」

「ああ。澄鈴<sup>すみれ</sup>。苗字は覚えてない」

「じゃあ、同じ花の名前なんだ。すみれちゃんって呼んでいい？」

こくつと頷くと、澄鈴はどこか遠くを見つめた。

「…ここにいると、色々忘れちゃうみたいなんだ。もう、あたしはほとんど覚えてないのかもしれない。覚えてるのは名前と……死ぬはずだったって事だけ」

「え？」

「あたしは死ぬはずだった。それははつきり覚えてる。でも、なんで死ぬはずだったか、なんで生きてこんな所にいるのかも、もうわかんない」

「そうなの……」

それは　すぐ悲しいことではないのか。そう蘭は思った。大

切なものも人も、次第に忘れていくなんて……なんという悲しい。

蘭の感覚で、おそらく一昼夜が過ぎた。ふたりは、色々な話をした。

「あんと話していると、なんか色々思い出す気がする。できるだけ長く、ここにいてほしいな」

言ってしまったから、それがどういう意味かわかったらしく、

「あ、ごめん。こんなところ、長々といたくないよね」

蘭は、くすつと笑った。

「すみれちゃんと一緒なら、もう少しいてもいいかな。でも 出方がわからないじゃ、ね」

「…あんたの家族は、元気にしてるの？」

「ああ、元気よ。お母さんは、ちよつと色々あつて別居中だけどその言い方に、澄鈴はちよつと変な顔をした。

「あと、家族と同じくらい、大事な奴がいるなあ。幼馴染みなんだけどね」

「へー、幼馴染み？」

「うん。新一っていうの。工藤新一」

「しんいち……」

澄鈴は、目を見開いた。次の瞬間、まわりの空気が変わった。蘭は、確かにそれを感じた。

そして 空に、眩まぼろしいばかりの光が現れた。

「え？……え！？」

戸惑う蘭とは対照的に、澄鈴は静かに一言、言った。

「……行きなよ。そこから出られる」

「え？どうして？」

澄鈴は、子供とは思えない微笑を浮かべていた。

「あんたが、思い出させてくれたから。あたしが、ここを『創った』」

理由を」

「え……!?!」

蘭は、自分の体が浮くのを感じた。

「あたしは……あの時死んだんだ。でも、あの人にもう1度会いたくて、『生』にしがみつこうとした。で、こんな訳わかんないところを創って、拳句あんたまで巻き込んだんだよ」

澄鈴がそう言う間にも、蘭の体は浮き上がり……透けていった。

「え、ちょ……すみれちゃん!」

そして澄鈴は、満面の笑顔で言った。

「大丈夫、あんたはまだ死んでない。戻れるよ。……新一兄さんに、よろしくね」

蘭が目覚めると、今度は白い天井が目に入った。

「蘭! 蘭!? 気が付いたか?」

新一や園子だけでなく、小五郎も英理も、少年探偵団まで、心配そうに蘭を取り囲んでいた。

「園子! 先生呼んでこい!」

新一の命令口調にも関わらず、園子はしっかと頷いて出ていった。

「峠は越しましたね。あとは安静にしていれば、じき退院できますよ」

診察が終わり、心配する園子をなんとか病室の外に押しやると、

新一は渋い顔で言った。

「悪い。オレが……お前に守られちゃったな」

自分が蘭を守ると、決めていたのに。蘭は答えるかわりに、新一に尋ねた。

「ねえ……すみれちゃんって子、知ってる? 小学生ぐらいの」

「何だよ、急に」

「いいから」

「すみれ？……ああ、そういえば」

新一がコナンになる前、1件の強盗殺人事件の捜査に協力した事があった。

金目の物はすべて奪われ、夫婦は惨殺され、ホラー映画のようになった家の中で、ひとり震える少女がいた。

夫妻の一人娘、澄鈴<sup>すみれ</sup>。

新一は真相を追いながらも、持ち前のお人好しで、何かと話し相手になってやり、えらく懐かれた。が 事件は解決したものの、まもなく澄鈴は癌<sup>ガン</sup>に倒れ……そのまま永眠した。

「それを後で知ったんだけど、さすがに……複雑だったな」

「そうだったんだ……」

「で？それがどうした？」

「あ、うん。寝てる間、その澄鈴ちゃんに会ってね。新一によるしく、って言われたの。……信じないならそれでいいわよ」

『は？』という顔の新一に、蘭はむくれた。

「でも 多分、澄鈴ちゃんが助けくれたんだろっねー……」

彼女はきつと、安らかに眠っているだろう 今度こそ、両親の元で。

(後書き)

思ってたより長くなりました。初短編です。

冒頭で澄鈴がつぶやいた言葉の全容は、「なんであたし、こんな所で生きてるんだろう」です。

元々、落書きしていて生まれたキャラ、澄鈴。妙に愛着がわいて、小説に登場させる事に。ちなみに落書きの中では、えらくコスプレっぽい衣装を着せておりました。

病名ですが、癌ってそんなに早くご臨終するのかわかると思いつつ、手っ取り早いので癌にしちゃいました。それに関してのつつこみは受け付けません(笑)

これからも、こんな感じの短編をちよくちよく書けたら、と思います。ご精読?ありがとうございます。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8680c/>

---

夢みた時間

2008年11月7日09時15分発行